

---

# ド近眼な彼女と甘党な彼

花ゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ド近眼な彼女と甘党な彼

### 【コード】

N6903Z

### 【作者名】

花ゆき

### 【あらすじ】

かなりの近眼な彼女が、穴に落ちて、西洋の部屋に！？  
そこで甘党な彼に出会います。

## ド近眼な彼女の出会い

坂井 まゆりはかなりの近眼だった。

そのため、大学では最前列に座る。

「眼鏡買えば？」

友人が飽きたように言うが、私はこれでいいのだ。  
見えすぎることはよくないから。

私に失望した母の顔も、もう分からなくなった。

外に女がいる父も、近眼のおかげで存在すら分からない。

見えない方がいい。

そんな私が慣れた道をつかって、家に帰る途中、足元がひんやりして暗闇に飲み込まれた。

マンホールにでも落ちたかな？

慣れた道だったんだけど。

そう、のん気にかまえてたら、いきなり西洋な感じの部屋にいました。

あ、これ夢だ。

私は現実逃避するしかない。

目の前に、金ぴかの彫りの深い成人男性がいたからだ。  
なんか王冠のってるし。

その男性が言った。

「ろーるけーきを持っているか？」

絶句する私に、更に言葉を重ねる男。

「確か24時間営業のコンビニにあるのだろう？その上、誰でも手  
に入るとか」

あれか。

何とか賞とった、有名なロールケーキ。  
確かにお金を払えば、誰でも手に入る。

しかし、常備しているはずがない。

「ありません」

あ、しよげた。

犬のしっぽと耳が下がる姿を連想してしまつ。

「代わりにチョコレートあげますから！」

カバンから、一口サイズのものを取り出す。

男の目が、ぱあぁと輝いた。

何だか可愛い男性だ。

男はチョコレートを口に放り込む。

しばらくすると、にへえつと頬をゆるませて笑つた。

「口の中で溶けるんだな。お主の名前は何と言つ？」

「坂井、まゆりです」

「そうか。坂井、感謝する」

男は笑つて、杖を掲げた。

すると光が私を包み、何も見えなくなつていく。

そして、私は戻つた。

マンホールの中に。

落ちたのは気のせいじゃなかったか。

目が悪いから、仕方ないよね。

そして、先ほどまで会っていた男を思い出して、マンホールから出  
れたら、コンビニに行こうと思った。

## ド近眼な彼女の餌付け

大学の授業が終わり、参考書やノートを片付けていると友人が待っていた。

「あ、待たせてごめん。次3階だよね」

「それは会ってるけど、どうしてそんなにカバンが膨れてるの？」

ロールケーキ全種類が入っているカバンを開けて、友人に見せる。友人が半目になった。ため息までついている。

いや、事情があつてね？

「やけ食いもほどほどにしまよ」

ちがーう!!!

そんな友人の誤解を思い出して、怒りながら、キャンパスの門を出る。

すると、あの金ぴか王子がいた。

「坂井、会いたかったぞ！」

近眼でどんな顔してるのかよく分からないけど、雰囲気笑顔なのだろう。

そんな彼の期待に応えるべく、鞆から取り出した。

「ロールケーキ全種類買ってきた。好きなだけ食べて」

王子は嬉しそうに手にとった。

しかし、一向に食べない。

「どうしたの？」

「食べ方が分からぬ」

そっぴや包装されてたな。

私はどれでも食べれるように、袋を開けていく。

そして沈黙が続いた。

王子を見ると、黙々と食べている。

よく見えないが、華やいだ空気だ。

……どんな顔をして、食べているんだろう。

私は気になって、王子に近づく。

「ち、近くないか？」

「これくらい寄らないと、目が悪いから見えなくて」

やっと、目を細めなくても見える距離になる。

その距離、およそ30?。

私の視線に気まずくしていたが、ロールケーキを口に含むと、とろけた笑みを浮かべる。

そして私の視線に気付き、視線を床に向けて頬を染めた。

なんて、真っ白な表情をするのだろう。

この世は汚いと思っていたけど、彼の表情一つ一つは、ちゃんと見たいと思った。

そんな凝視していた私だから、発見してしまったものがある。

私は急いでポケットから、とあるものを取り出した。

それを王子の頬を掴み、唇に塗る。

乾燥で、唇が切れていたからだ。

「これで、心置きなく食べれ」

何故か急に話せなくなった。

何故か薬用リップの桃の香りが間近にする。

……何故か、王子がやたら近い。

この人は目をつぶっていても、綺麗だな。

そう現実逃避していると、至近距離で王子と目が合った。

「容易に男に近づくなよ」

そう言って笑う王子に、男を感じてしまい、赤面する私。

彼の表情を目に焼きつきたい。  
初めて、眼鏡がほしくなった。

**ト近眼な彼女の餌付け（後書き）**

次で終わり予定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6903z/>

---

ド近眼な彼女と甘党な彼

2012年1月15日02時47分発行